平成30年東京都輸血状況調査集計結果（概要）

1　調査対象・回答率

(1) 目　的

都内の医療機関における血液製剤の使用状況等を調査し、適切な血液製剤使用の推進をしていくための資料とする。

(2) 対　象

都内にある病床数 20 床以上の医療機関：628 箇所、調査期間：平成 30 年 1 月～12 月を対象とし、郵送にて実施。回収方法は、郵便、ファクシミリ、電子メールのいずれかとした。

(3) 結　果

529 機関（回答率 84.2%）（前年：630 機関中 536 機関　同 85.1%）から回答が得られ、うち一般病床 100 床以上の機関は 193 機関(同 92.3%)であった。

得られた回答は「平成３０年輸血状況調査集計結果（概要)」としてまとめるとともに、100 床以上の 193 機関の回答を元に「評価指標」を作成した。

(4) 報　告

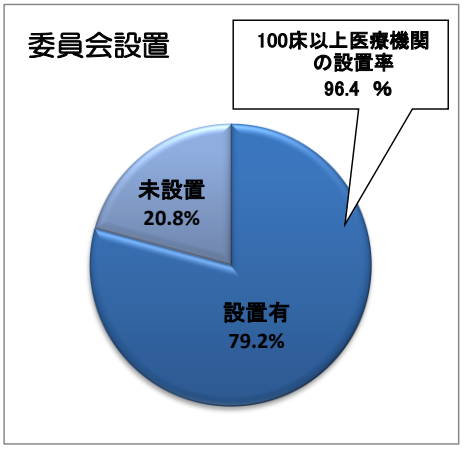
「平成３０年輸血状況調査集計結果（概要)」「評価指標」を都ホームページにて掲載するとともに回答のあった全医療機関に送付する。また、100 床以上の 193 機関については、「平成３０年血液製剤適正使用推進に向けた評価指標について」（個票）を作成し送付する。

2　集計結果の概要（項目別）

(1) 輸血療法委員会の設置状況

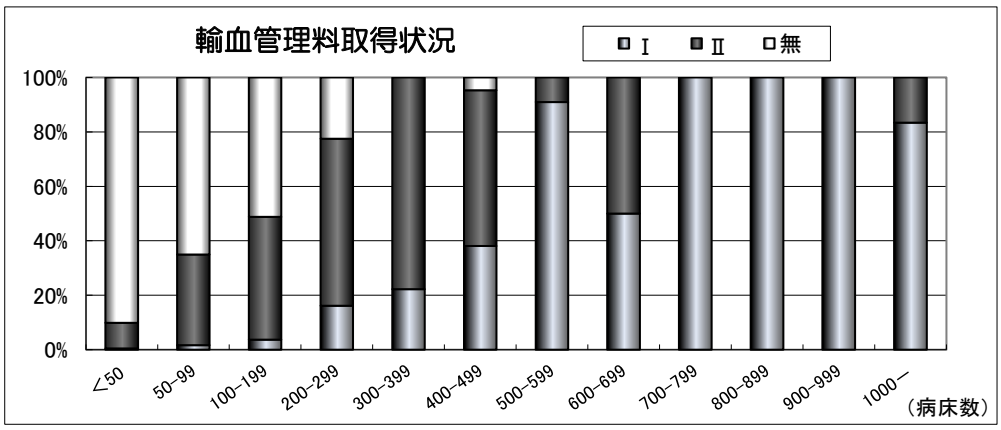
委員会を設置している医療機関は、419 機関（79.2%）であった。（前年 440 機関 82.1%）

一般病床 100 床以上の 193 機関でみると、委員会設置は 186 機関(96.4%)であった。（前年 184 機関 96.8%）

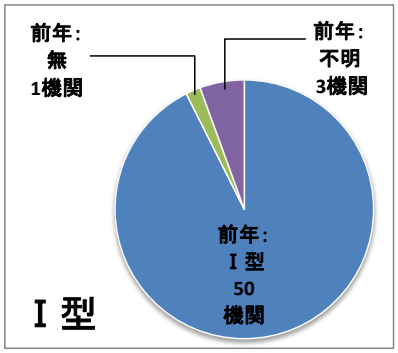


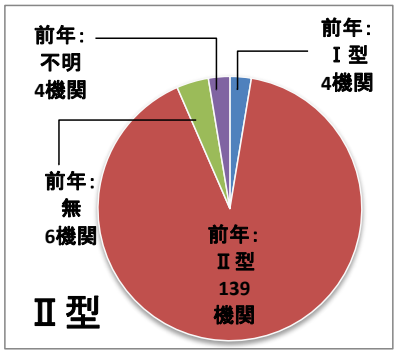
(2) 輸血管理料（Ⅰ型・Ⅱ型）の取得状況

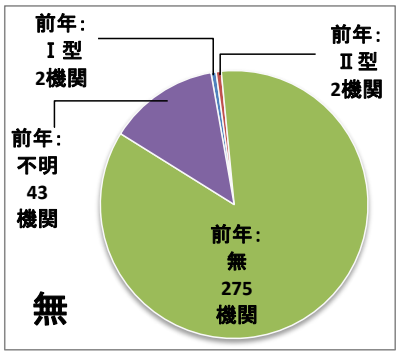
取得機関は 207 機関（39.1%）で、内訳はⅠ型 54 機関、Ⅱ型 153 機関であった。(前年：205 機関 38.2%　Ⅰ型 60 機関、Ⅱ型 145 機関)



輸血管理料の取得状況の変化（前年対比）

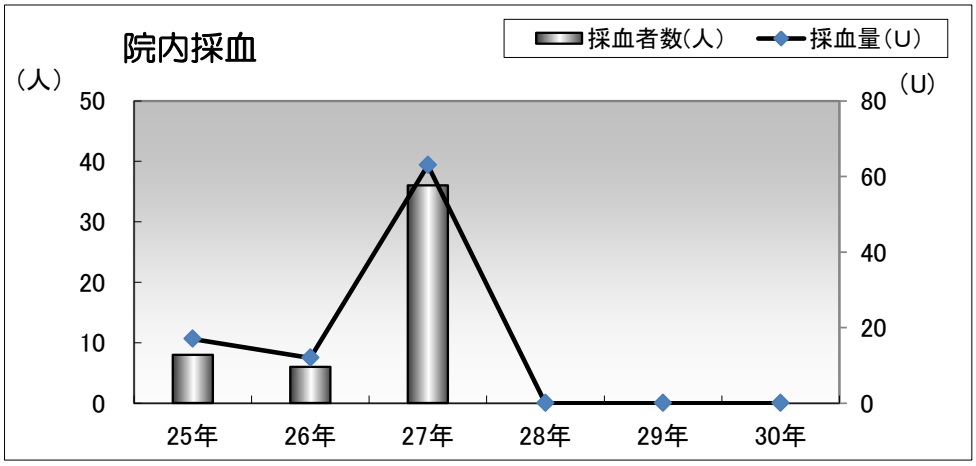






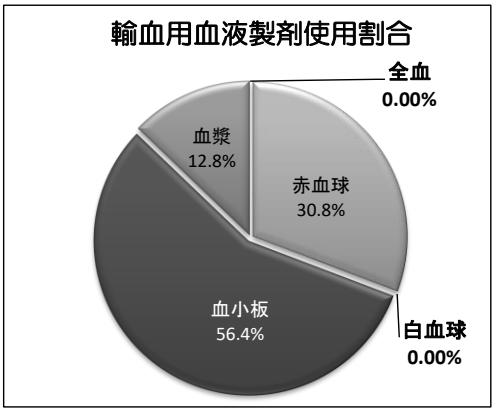
(3) 院内採血の状況

採血者数は０人（前年：０人）、採血量は0U（前年：0U）であり、前年と同様である。



(4) 輸血用血液製剤の使用状況

ア　赤血球製剤の使用量が輸血用血液製剤全体に占める割合は30.8%(637,696U)で、前年30.8%(653,904U) とほぼ横ばいである。

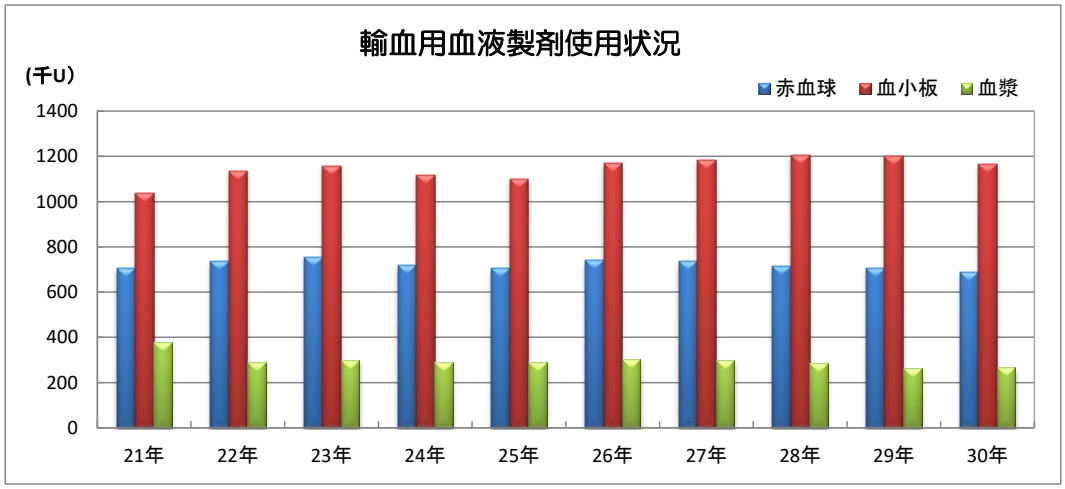


イ　血小板製剤の使用量が輸血用血液製剤全体に占める割合は 56.4%(1,168,166U)で、前年 56.8%(1,203,838U)とほぼ横ばいである。

ウ　血漿製剤の使用量が輸血用血液製剤全体に占める割合は12.8%(265,992U)で、前年 12.4%(262,849U) とほぼ横ばいである。

エ　全血製剤（日赤製）の使用量が輸血用血液製剤全体に占める割合は0.00%(32U)で、前年の使用はなかった。

オ　白血球濃厚液の使用はなかった。



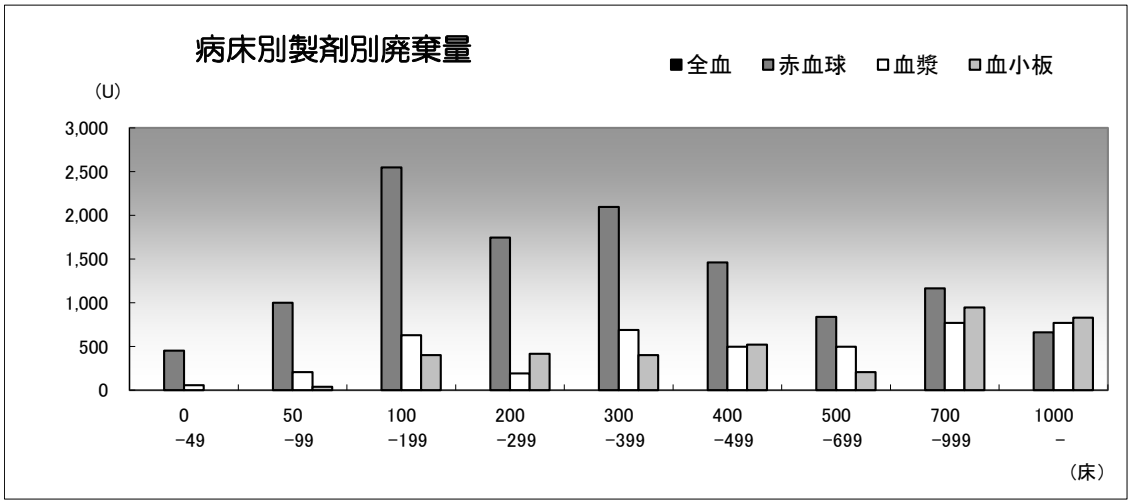
※「血漿」は、平成22年調査より単位数を変更した。
（～平成21年）200mL 由来１バッグ=1.5 単位、400mL 由来１バッグ=3 単位、成分由来１バッグ=5 単位
（平成22年～）200mL 由来１バッグ=　1 単位、400mL 由来１バッグ=2 単位、
成分由来１バッグ（450mL）=3.75 単位、成分由来１バッグ（480mL）=4 単位

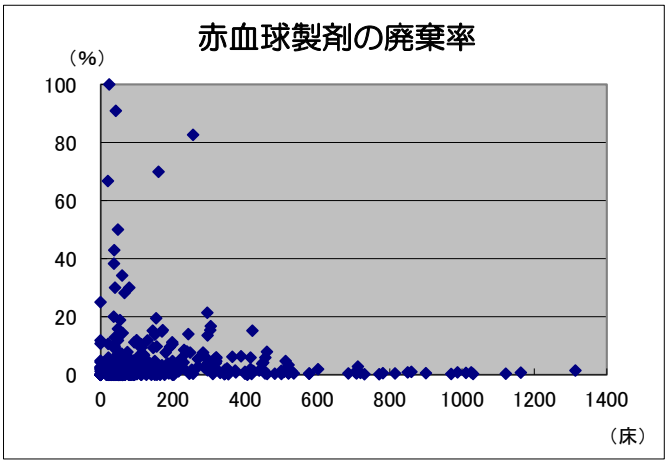
(5) ＧＶＨＤ予防のための放射線照射血液の使用状況

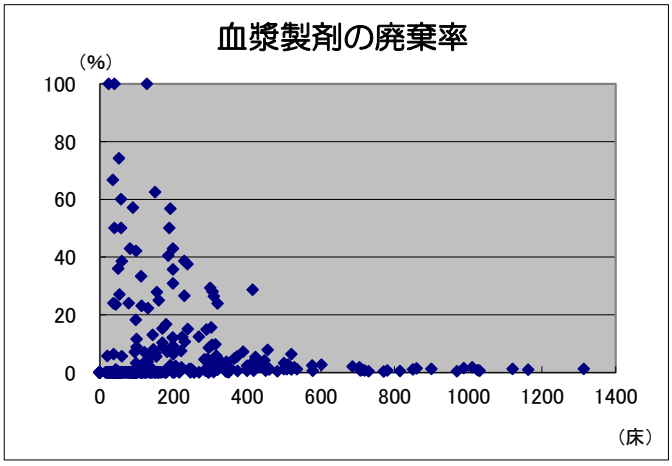
輸血用血液製剤使用病院 407 機関中の全てが照射血を使用しており、前年の 100%と同様である。

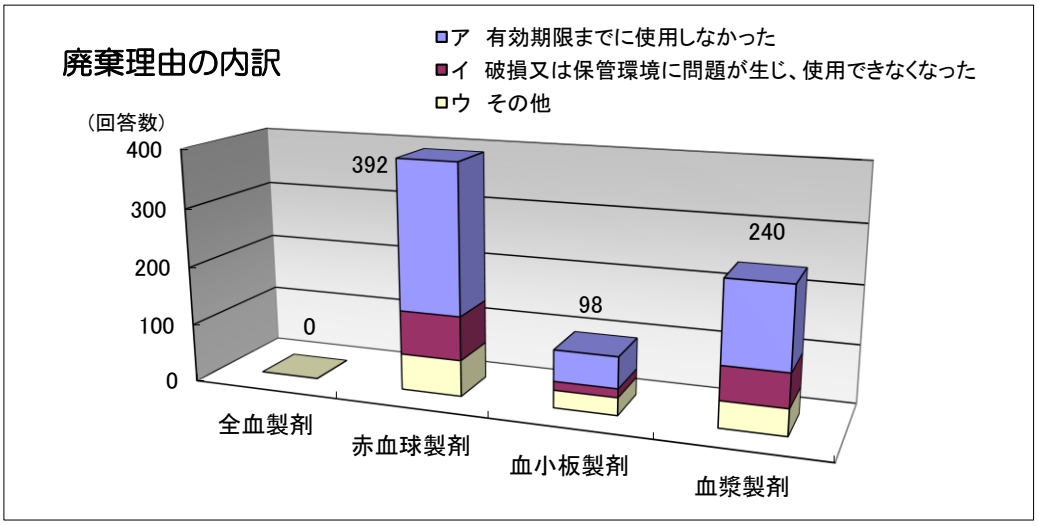
(6) 製剤別購入・廃棄量の状況

ア　全血製剤の廃棄はなかった。
イ　赤血球製剤の廃棄率は 1.9%(11,962U)で、前年 2.0%(13,445U)より減少した。
ウ　血小板製剤の廃棄率は 0.3%(3,530U)で、前年 0.3%(3,933U) とほぼ横ばいである。
エ　血漿製剤の廃棄率は 1.7%(4,528U)で、前年 1.4%(4,225U) より増加した。



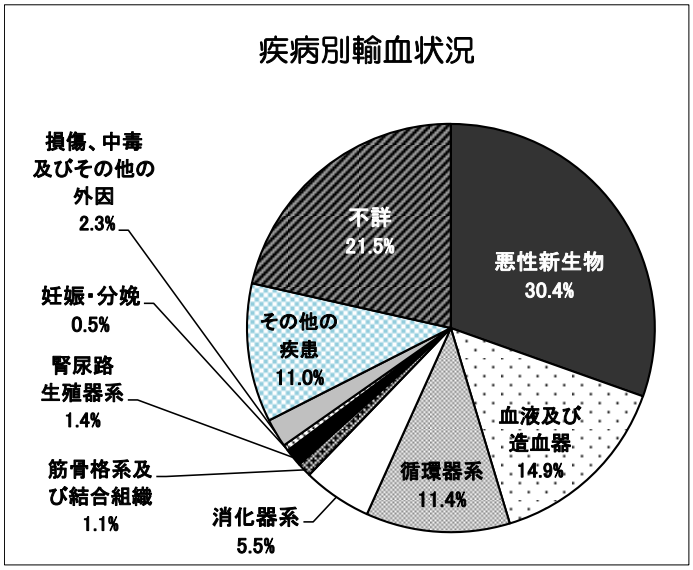


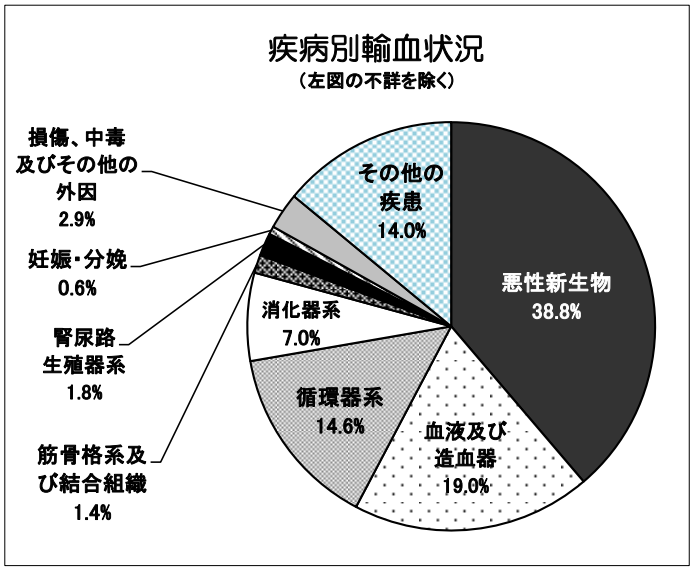




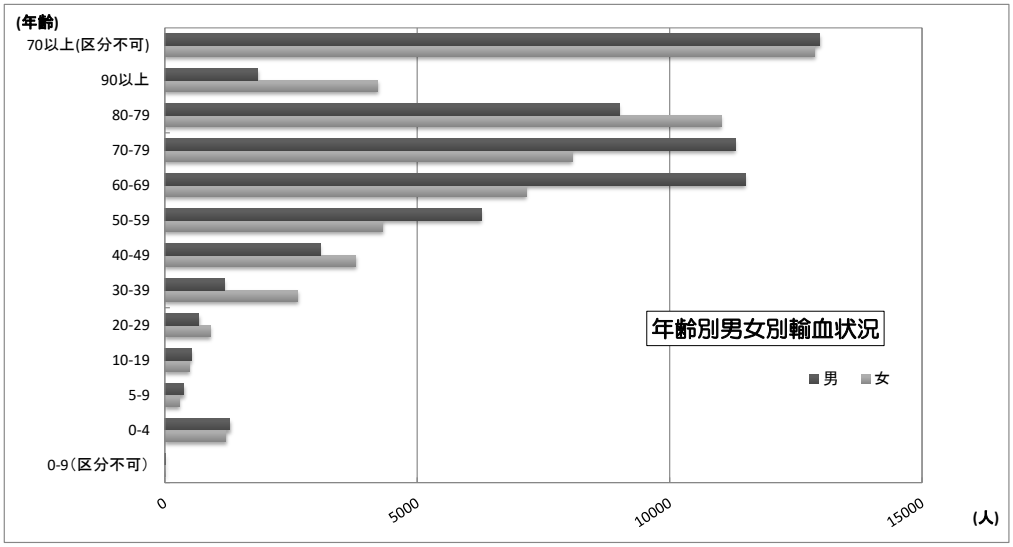
(7) 疾病別及び年代別輸血状況

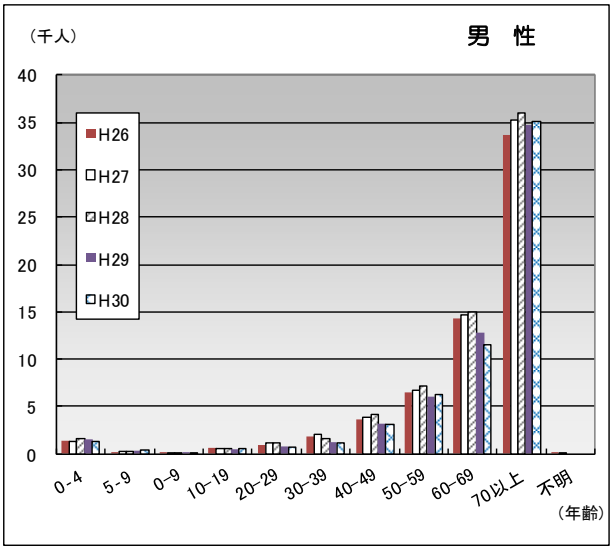
・疾病別では、悪性新生物の治療に全体の 38.8%が使用されており、前年（37.8%）とほぼ同様である。

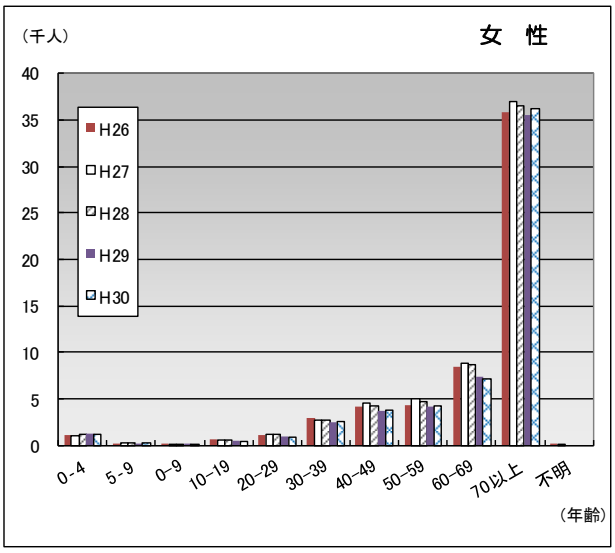


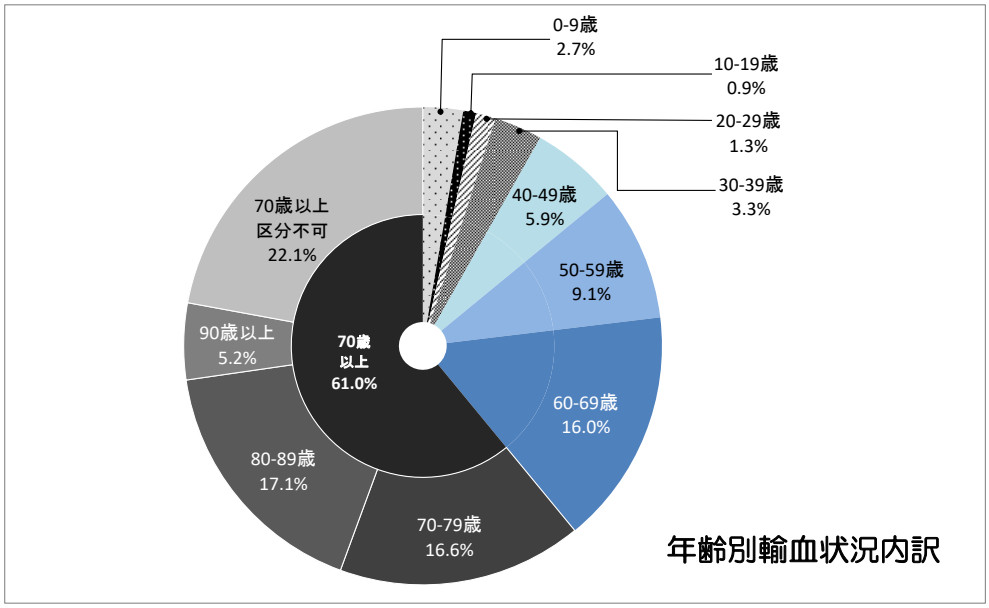


・年代別では、50 歳以上の患者への使用が全体人数の 86.1%、60 歳以上　77.0%、70 歳以上　61.0%で、前年（50 歳以上 85.7%、60 歳以上　77.0%、70 歳以上　59.8%）より増加している。
※同一人について:30 日間の複数回使用は１人としてカウント。平成 29 年調査より 70 歳以上も 10 歳ごとに集計。区分できない年代については「区分不可」として合計値で表記。



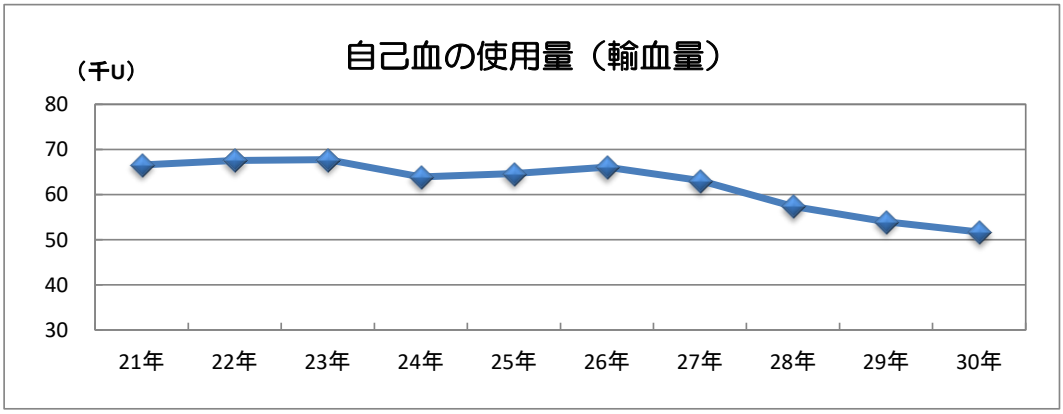






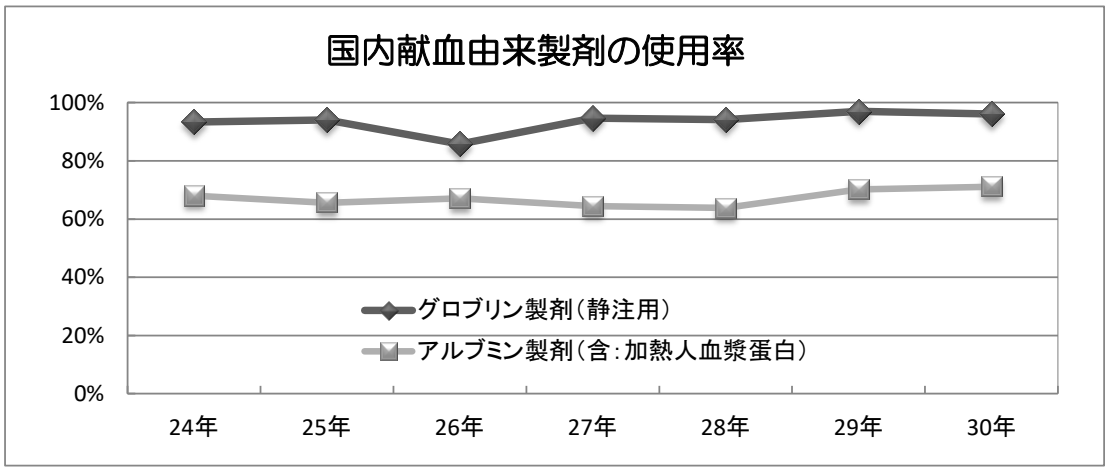
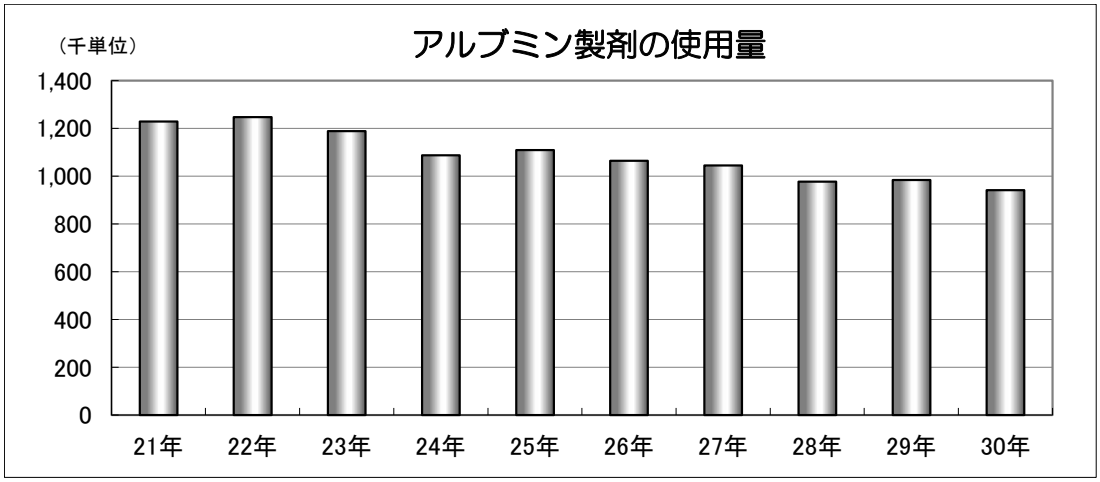
(8) 自己血輸血の状況

自己血の使用量(輸血量)は51,687.9Uで、前年（54,014.7U）より減少している。



(9) 血漿分画製剤の使用状況

血漿分画製剤（トロンビン及び組織接着剤を含まない）の使用量は498,803本で、前年（521,043本）より減少した。

なお、グロブリン製剤(静注用)の使用本数における国内献血由来製剤の割合は96.1%（140,968本)で、前年97.0%(141,609本)とほぼ横ばいである。

また、アルブミン製剤（加熱人血漿蛋白を含む）の使用本数における国内献血由来製剤の割合は、71.7%(171,249本)で、前年70.2%(182,177本)より国内自給率は向上した。